

委託事業実施内容報告書

平成23年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

【日本語指導者養成】

受託団体名 特定非営利活動法人
中学・高校生の日本語支援を考える会

1 事業の趣旨・目的

横浜市とその近隣で日本語・教科支援を行っている外国人日本語指導者及び日本人指導者を対象として、外国につながる子どもたちの支援に必要な態度、知識、スキル等を学んでもらい、子ども達の目線に立った支援ができる指導者を養成すること。

また、研究者から各専門分野の知識を学ぶと同時に、さまざまな立場（小・中学校の国際学級担当教員、横浜市ならびに他市の日本語講師）の実践者からさまざまなアイデアを得、意見交換をしながら、外国につながる子どもたちを理解し、さらに自らの指導に活かしていける指導者を養成すること。

2 運営委員会の開催について

【概要】

開催日時	開催場所	出席者	議題	会議の概要
平成 23 年 6月 18 日	かながわ 県民センタ ー	ヤマダ キヨコ ベッティ 宮崎幸江 坂内泰子 嶽肩志江 樋口万喜子 頼田敦子	・講座日程とシラバス ・受講生の募集方法 について ・応募者多数の場合 の選定方法につい て	講座日程とシラバスの内 容検討・受講生の募集方 法、受講条件の確認、開 講までの予定・スタッフの 役割分担
平成 23 年 9月 1 日	かながわ 県民センタ ー	ヤマダ キヨコ ベッティ 宮崎幸江 坂内泰子 嶽肩志江 樋口万喜子 頼田敦子	・後半の講座内容、 特に公開講座の内 容について	・公開講座の内容につい て、受講者の身近な問題 にポイントを絞って講座を 行うために、どのような事 例を挙げて講義を進めて もらうか。 ・受講生の感想から後半 の講座の内容確認。

平成 24 年 1 月 5 日	かながわ 県民センタ ー	ヤマダ キヨコ ベッティ 宮崎幸江 嶽肩志江 樋口万喜子 頼田敦子	講座の振り返り 講座報告書 アンケートから今後 のフォロー	講座全体を振り返っての 反省と成果の確認・アンケ ートから研修後の発展のし かた、展開方法について 話し合う
--------------------	--------------------	--	--	--

【写真】



3 養成講座の内容について

(1) 講座名 「外国人日本語指導者とともに学ぶ日本語指導研修講座

～子どもの学ぶ力と心の成長を支えるために～

(2) 目標 横浜市とその近隣で日本語・教科支援を行っている外国人日本語指導者及び日本人指導者を対象として、外国につながる子どもたちの支援に必要な態度、知識、スキル等を学んでもらい、実践につながる具体的な方策を得、互いに知識を共有し、今後の指導に活かしていける指導者を養成すること。

(3) 受講者の総数 24 人

(出身・国籍別内訳 日本 16 人 中国 7 人 韓国 1 人)

(4) 講義時間数(回数) 34 時間 (全 11 回)

(5) 参加対象者の要件 横浜市とその近隣で日本語・教科支援を行っている外国人日本語指導者及び日本人指導者

(6) 受講者の募集方法

(ア) 運営委員のヤマダ キヨコ ベッティ(横浜市教育委員会指導主事助手)より横浜市の国際教室担当教諭、横浜市日本語講師にチラシ(別紙参照)を送付。

(イ) 川崎市、大和市、藤沢市、厚木市、横須賀市、相模原市、の各教育委員会担当部

署に講座の趣旨、内容連絡し、日本語指導員へのチラシ配布を依頼。

(ウ)「かながわ多文化子ども支援ML」、(財団法人かながわ国際交流財団 多文化共生・協働推進課)、「kodomo-ml」(中国帰国者定着促進センター教務部)、「Yokohamakokusai」(横浜市外国人教育連絡協議会:横浜市立の小中学校の国際教室担当者が中心メンバー)などのメーリングリストで受講生募集。

(エ) ホームページに募集記事を掲載。<http://nihongosien.jugem.jp/>

(7) 会場 神奈川県民サポートセンター(11月20日を除く全て)

〒221-0835 神奈川県横浜市神奈川区鶴屋町 2-24-2 電話 045-312-1121(代)

民団(11月20日公開講座)

〒221-0835 神奈川県横浜市神奈川区鶴屋町 2-10-1 電話 045-316-0815

(8) 使用した教材・リソース

『にほんごだいすき』シリーズ 鈴木重幸・工藤真由美・小高愛 むぎ書房

『にほんごをまなぼう』1～3 文部省 ぎょうせい

『こどもにほんご宝島』アスク出版

『国語』 光村図書 4年上

『社会』 光村図書 5年

『外国人児童・生徒を教えるためのリライト教材』 光元聰江 ふくろう出版

『JSL 中学高校生のための教科につなげる学習語彙・漢字ドリル』 NP0 中学高校生の日本語支援を考える会編 ココ出版

『進学を目指す人のための教科につなげる学習語彙 6000 語』 NP0 中学高校生の日本語支援を考える会編 ココ出版

(9) 講座内容

日時	講座名／学習内容	講師	受講者数
7月28日 13:30～14:30	外国につながる子どもの現状と課題 ～多文化教育の視点から～	横浜国立大学留学生センター 講師 樋口 万喜子	15人
7月28日 14:40～16:40	母語を大切にしたい日本語支援を考える	多文化活動連絡協議会代表 Norman Nakamura	15人

8月4日 13:30～16:40	【実践編 1】楽しく学習させるための日本語教材 ～子どものレベルに合わせた使い方、作り方～	横浜市教育委員会 日本語講師 頼田敦子	17人
8月18日 13:30～16:40	バイリンガルの子どものための言語習得	お茶の水女子大学大学院 助教 西川 朋美	12人
8月25日 13:30～16:40	【実践編 2】教科へつなげるための日本語指導 ～『にほんごまなぼう』を使って～	横浜市教育委員会 日本語講師 古屋 恵子	15人
9月11日 13:30～16:40	外国人につながる子どもの言葉の心の支援 ～豊橋の取り組みから～	愛知県豊橋市教育委員会 外国人児童生徒教育相談員 築樋 博子	13人
9月25日 13:30～16:40	国際教室との連携で育む子どもの学ぶ力と居場所づくり	横浜市立本町小学校 教諭 林 宝愛 横浜市立鶴見中学校 教諭 土屋 隆史	14人
10月9日 10:00～12:00	リライト教材とは？ ～その作り方と活用について～	岡山大学教育学部 客員研究員(元 岡山大学教育学部 助教授) 光元 聡江	19人
10月9日 13:00～15:00	【実践編 3】 「授業で使えるリライト教材づくり」(ワークショップ)		17人
10月23日 13:30～16:40	【実践編 4】『にほんごだいすき』を使ったワークショップ ～初期指導からよりすすんだ日本語指導～	千葉大学国際教育センター 講師 小高 愛	12人
11月6日 13:30～16:40	【実践編 5】『こどもにほんご宝島』を使ったワークショップ ～子どもをひきつける教材・素材～	東京女子大学 講師 練馬区教育委員会日本語指導員 谷 啓子	20人
11月20日 13:30～16:40	バイリンガル教育と母語支援 (公開講座)	トロント大学東アジア研究科名誉教授 中島 和子	19人

12月4日 13:30～15:30	母語で支える子どもの学力と 心の成長	神奈川外国人教育相談 サポーター 東京学芸大学大学院博 士課程 李 原翔	13人
12月4日 15:40～16:40	振り返り ～多文化の子ども たちも伸び伸び育つ社会を作 るために～	横浜国立大学留学生セ ンター 講師 樋口 万喜子	13人

(10) 講座の評価

①受講生に対するアンケート

- 自分がいかに固定観念で物を見ていたか、気づかされました。子どもへの日本語教育は学習支援とセットでとらえてゆくべきですね。気付きの多いお話をいただき感謝します。
- 財産としての母語をもっと大切にし、それに付け加える形で日本語や、日本語で学ぶ教科の知識が得られるのは理想的だと感じました。そういった力を育てるシステムをより充実させていければと思いました。
- 教科指導をどう具体的に作ってゆくか、12月までに勉強させて頂ける中で、考えていきたい。他の市で御活躍の先生方のお話をたくさんうかがいたい。
- 教材の効果的な使い方が分かったので、ぜひ実践していきたいと思います。特に学習語彙、読解に関わるものが多く、是非9月から使っていきたいです。授業が楽しみです！
- 9月から日本で生まれて日本で育った3年生の日本語指導を始めます。最初にどういう項目をチェックしようかと考えていたところだったので、今日のお話は大変役に立ちました。
- 言語の干渉のお話はとてもわかりやすかったです。第一言語と第二言語の音の違いはとても勉強になりました。
- 現在、国際教室で5年の社会科を教えています。教材のおもしろさもありますが、日本で生活する上で大切な情報が得られる社会科に注目しています。今日も大変勉強になりました。ぜひ9月に実際に扱っていきたいです。
- グループワークでいろいろな方と話す事ができ、勉強になった。
- 豊橋市の外国人児童生徒の支援内容全般について～日本語指導員とバイリンガル相談員が別になっていて、お互いに協力し合う部分がとても良いと思いました。
- 段階を追って指導レベルを上げていく、その子の状況に合わせて教材を選び飽きさせないこのように指導の時間や量を考えていく大切さを知りました。
- このところ国際教室の運営(指導や保護者対応など)で行き詰まっていたので、今日お話をうかがって元気が出ました。私の勤務している学校は、横浜のように体制がしっかりしていない(と思われる)ので、横浜の取組みをもっと具体的に知り、自分たちのやり方を変えていきたい。
- 小学校、中学校の立場から国際教室のあり方を聞くことができ、大変参考になりました。

●リライト教材の有効性と課題について～来日1カ月でリライトを使われると聞いて驚きました。でも、絵やペープサートなど視覚に訴えるものと母語支援があれば、子どもにとって興味深いものとなるし、しっかりした原作はリライトでも十分伝わる。子どもの意欲も増すことが分かった。

●基礎学習（初期指導）→学級の進度に合わせて、リライト教材を作る→在籍学級の学習につながる学習（課題解決学習）→発展学習のつながった過程について、分かった。

●ペアで実際にやってみて面白さと難しさを実感しました。子どもの役をしてみても、少し子どもの気持ちになれました。

●母語でのコミュニケーション不足が影響していることがわかりました。ケースは一人ひとり違うので、担任と保護者と国際教室で話し合っていくことが大切だと思いました。

●異文化の中で思春期をむかえる子どもたちの難しさを大人が理解してあげること、それでもその困難を乗り越えなければいけないことを理解させる。そのバランスの取り方の難しさを感じます。

●今回の講座を通して、子どもたちのおかれた環境や心の問題、教材の作り方など、いろいろな お話を伺い、私自身がネットワークを広げることの大切さを実感しました。

●子どもたちの将来のため、社会を支える人材を育てるためにも、しっかりと教育をしていかなければいけないと思いました。また、学校の役割を全職員で共通理解できるよう、発信していかなければならないと思いました。

②実施主体からの研修内容結果評価

アンケートにもあったように、日ごろ行っている指導の実態と照らし合わせて研修講座の内容を理解し、つなげていこうという姿勢が多々見られたことは評価できると考える。

また、具体的な教材を用いた実践を行うことで、今後の指導にすぐ応用できる内容であったし、講座の途中からは、ワークショップの成果をすぐに教材の形にした実践例等を他の受講生に紹介し成果を共有できた。このような受講生同士の情報共有の場を、開始当初から意識的に持ち、全日程を講師による講義で埋めてしまわず、受講生によるプレゼンの日を設けることも今後の課題として考えていきたい。

③実施主体からの外国人支援体制等今後の計画

●今回の研修講座を通して横浜市及び近隣の日本語指導員のネットワーク作りの第一歩ができたと思う。今後もこのつながりを生かし、教材や指導法等の勉強会の開催を行い更なる支援を行っていきたいと考える。

●地域の外国人に日本語学習や生活の支援を行っている人材が、多文化共生を念頭においた今日的課題に対応すべく、多様な人的リソースをコーディネートする方法や、様々な組織・機関と連携協働する知識や技術を学んで、実践していける人材を養成する。

(11) 事業の成果

①他事業との連携

同じく文化庁委託事業である「コーディネーター養成講座」(当NPO主催)と連携しトロント大学名誉教授、中島和子先生をお呼びして公開講座「バイリンガル教育と母語支援」を行った。年少者の言語環境における「ダブルリミテッド予備軍」という大きな課題とそれに関する知識を共有し、それを防ぐための教育的方策を検討できた。また、公開講座として一般の参加者からの意見も出、広く話し合う場を持てた。

横浜市教育委員会の日本語指導者の研修会事業と連携し、年少者日本語教育の研究者の視点を入れて研修内容を吟味し、児童生徒のきめ細やかな指導に求められるものを加えた。講師から日ごろの研究成果を教授されることで、受講者である日本語指導員のブラッシュアップ研修となった。

②研修後の人材活用

受講生は、すでに日本語指導員や教員として外国につながる児童生徒の指導に関わっている方々であるので、研修講座の成果としてすぐにリライト教材や、初期指導に有効な教材等の実践をし、それを受講生間で共有するなどの動きが出てきた。

このような現場発信の実践的な取り組みを続け、受講生のネットワークで共有し、来年度もさらにその輪を広げていきたいと考える。

(12) 今後の課題

「生活者としての外国人」の当事者である外国人指導者とともに学ぶ日本語指導が今回の一つのテーマであったが、年少者の日本語教育は日本語の上達と学力向上を二大目標とする。外国につながる子どもたちは、将来、多文化共生社会の貴重な人材となる。その子どもたちが短期間にリテラシーを持った市民に成長できるよう、専門的な知識や技術を持ち、教育全般を見通すことができる支援者を養成することが課題である。

また、講座を通して母語の重要性を学び、母語教材の必要性を強く感じたが、日本語初期指導の教材は多いものの、中高生が教科学習に連動できる教材はまだ少ない。そうした教材作成も課題であろう。

さらに、今回の研修のみに終わらず、時代と共に変わるニーズに合わせた研修を継続する必要がある。現場から必要性を感じたことを反映し、すぐに研修の場を持って学び、考え、結果を共有できるような取り組みが必要である。